

第 8 回 高校生東南アジア小論文

コンテスト

優秀賞

大阪府立槻の木高等学校 2年

田原 凛乃 さん

タイ政府はLGBTQ+フレンドリーを掲げており、タイのBLドラマは日本を含むアジア全域で人気を博している。タイの文化の影響を受けて、日本は学びを得ることができているのだろうか。私は、LGBTQ+がポップカルチャーとして消費される現状がよいものだとは一概には言えないと考える。

男性同士の恋愛を描いた作品ジャンルはBLと呼ばれ、近年は若い女性を中心にブームとなっている。新型コロナウイルス感染症の拡大により、世界中の人々が外出を制限される中、2020年にタイで放送されたBLドラマ『2gether』が世界的注目を浴びた。無料配信され、総再生回数は8億回を超えている。BLが一般向けの娯楽としてジャンルを確立したことは、間違いなくジェンダー平等への大きな一歩と言えるだろう。一方で、BLなどのポップカルチャーはマジョリティに受け入れられやすいがために、実際に起こっている性的マイノリティへの差別を霞

ませてしまっているのではないか。

日本で制作されたBLドラマ『おっさんずラブ』は、のちに映画化されるなど絶大な人気を誇る作品だ。今年1月から放送されていた『おっさんずラブ - リターンズ - 』は、男性カップルが結婚しているという前提で物語が進む。あらゆる宣伝媒体で二人の生活のことを「新婚生活」と表現しているのだ。現在の日本では同性婚は認められておらず、当然作中の2人も入籍できない。実在する同性カップルが直面している問題を無視することは、この現状を不可視化させることに繋がる。

その点において、タイのBLドラマは「当事者向き」と言える。6月はプライド月間といい、世界中でLGBTQ+のためのイベントが多く行われる。タイでは、LGBTQ+を題材とした作品に出演している多くの俳優が自身の指向や性自認に関わらず、SNSを通じてLGBTQ+コミュニティを支持する投稿を、6月中は特に積極的にしている。俳

優などの影響力がある立場から声を上げることは、LGBTQ+の権利獲得には必要不可欠だ。

そうした人々の努力が実り、タイでは同性婚を認める法が2025年1月に施行される。LGBTQ+フレンドリーな社会でありながらも権利向上を訴え続けたことで、パートナーシップ法、そして同性婚の法制化と段階を踏んで、誰もが暮らしやすい社会へとより一層成長したのだ。ピュー・リサーチ・センターの調査によると、日本の同性婚賛成率は68%だがというが、「日本の伝統的な家族観が壊れる。」という反対意見も多い。商業的に同性愛を消費するのではなく、LGBTQ+を題材とした作品に関わる人々が自身のセクシャリティに関わらず代表して声を上げ、作品を通してLGBTQ+当事者に寄り添うことこそが、ジェンダー平等の実現に繋がると私は思う。

参 考 資 料 :

論 集

① 愛知淑徳大学論集

② 日本におけるBLドラマの拡大と浸透(2023.3) 若

松 孝 司

③ https://aska-r.repo.nii.ac.jp/records/8769/file_details/0041013202303141153.pdf

ホ ー ム ペ ー ジ

① 日本経済新聞

② タイ、同性婚法案を可決 東南アジア初の

合法化

③ <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOGS187TU0Y4A610C2000000/>

ホ ー ム ペ ー ジ

① 毎日新聞

② 同性婚への道のり 明日も太陽は昇る

③

<https://mainichi.jp/graphs/20240217/hpj/00m/030/001000g/20240210pol00m010004000p>

ホ ー ム ペ ー ジ

① 日本経済新聞

② 同性婚、インドネシアは賛成率5% 宗教観

で温度差

第8回優秀賞作品
田原 凜乃さん (タイ部門)

③ <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOGM22A9S0S4A120C2000000/>